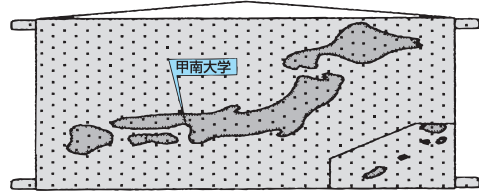


Zephyr

〈第71号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集*各言語文化圏の文化財にみる人々の習慣》

★所長からのメッセージ：アメリカの歴史・文化の中心：ワシントン D.C.	津田 信男	2
〔英語〕 What is Canadian Culture?	Stanley KIRK	3
〔ドイツ語〕 グリム童話の「森」と環境に優しいドイツ人の行動	藤原三枝子	4
〔フランス語〕 フランス人とパリの Patrimoine (文化遺産)	D・シッシュ	5
〔中国語〕 中国の世界遺産—平和を求める万里の長城—	胡 金定	6
〔韓国語〕 朝鮮時代の都城に現れる儒教思想	金 泰虎	7
〔日本語〕 重要文化財『徒然草』	谷守 正寛	8

甲南学園創設者
平生夙三郎

「世界に通用する
紳士・淑女たれ」



「英語+1 (第2外国語)」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙 (年3回刊行)

“If you talk to a man in a language he understands, that goes to his head. If you talk to him in his language, that goes to his heart.”

(Nelson Mandela)

「外国語はコミュニケーションのツールである」という考え方にも一理ありますが、世界中の多くの国で使われている英語やフランス語について言えば、「人々が用いる言葉」は、それぞれの国や地域の歴史と文化を背負っています。フランスのフランス語とカナダ・ケベック州のフランス語では、文化的背景が異なるため、表現の仕方、発音の仕方も微妙に違いますし、人々のメンタリティーも異なります。英語に関しても、イギリス人のネイティブの先生から「イギリス英語とアメリカ英語では、好んで使う表現が異なる」と聞きました。多くの人々と円滑にコミュニケーションするためには、スタンダードとされる形で外国語を学びますが、それぞれの国や地域の背景にある歴史や文化に関心を持つことが望ましいでしょう。

今回、各言語の先生方が書かれた文化財についての珠玉のエッセイから、それぞれの文化の重みを感じ取ってください。外国語学習で重要な点は、目標言語の運用能力を養成することに加え、文化や社会制度の異なる人々と相互理解を深めて衝突を避け、持続可能な開発 (sustainable development) により文化遺産と地球環境を守ることなのです。 (中村典子)

アメリカの歴史・文化の中心：ワシントン D.C.

国際言語文化センター所長 津 田 信 男

アメリカの首都ワシントン DC は、芸術、建築、文化の宝庫で National Mall と呼ばれる、複数のスミソニアン博物館群や美術館や記念館などが点在しています。私が留学していた頃、ルームメイトがこの地域出身で冬休みに遊びに行っていたことがあります。国立の博物館・美術館の入場料は全て無料で楽しむことができます。特にお勧めしたいのは、国立航空宇宙博物館と国立アメリカ歴史博物館です。国立航空宇宙博物館では、ライトフライヤー号（1903年にライト兄弟が最初に運転した飛行機の実物）、スピリット・オブ・セントルイス（チャールズ・リンドバーグが大西洋に横断成功した最初の一人乗りの飛行機の実物）、アポロ 11 号（月面着陸に人類史上初めて成功した司令船）、パイオニア 10 号（世界初の木星探査機）など沢山の航空機や宇宙船が展示されています。また、IMAX Theater（有料）では、航空関係の映画が上映されています。過去に人気があったのは実際にスペースシャトルから地球の様子が見える短編映画でした。

国立アメリカ歴史博物館では 1876 年から現代までの、アメリカの輸送手段の歴史を見ることができます。最初に開発された自動車のみならずバイクや蒸気機関車などの交通に関する展示品が収められています。また、全アメリカ大統領に関する展示品やアメリカの大衆文化の作品が展示されています。私が訪れた時はエジソンが発明した電球や蓄音機（レコードプレイヤー）、銃、ライフルや 50 年ほど前のアメリカのお店のレプリカを見ることができました。今は初代アップルコンピュータや元ボクシングヘビー級チャンピオンのモハメド・アリのグローブも展示されているようです。

ワシントン D.C. にはこの他、ホワイトハウス、国際スパイ博物館、国立自然史博物館、国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館、国立アメリカ・インディアン博物館、国立アフリカ美術館、リンカーンメモリアルなど沢山の見所があります。私はリンカーン大統領が暗殺されたフォード劇場を見学する機会がありました。アメリカの歴史・文化を知りたいければ、一度ワシントン D.C. を訪れてみてはいかがでしょうか。

参考資料 ([https://ja.wikipedia.org/wiki/ 国立航空宇宙博物館](https://ja.wikipedia.org/wiki/国立航空宇宙博物館)、
[https://ja.wikipedia.org/wiki/ 国立アメリカ歴史博物館](https://ja.wikipedia.org/wiki/国立アメリカ歴史博物館))



What is Canadian Culture?

国際言語文化センター准教授 Stanley KIRK

Key vocabularies: artifact, asset, compromise, diverse, ethnic, heritage, immigrant, inhabit, majority, minority, mosaic, multiculturalism, province, settlement, settler, values



Justin Trudeau, the prime minister of Canada

Did you know that Canada is one of the youngest countries in the world? In fact, it was founded in 1867. That was only a few months before Kobe Port was opened to the world! This means Canada is only 151 years old — a very long time for a person, but very short time for the history of a country.

However, the place that is now called Canada has a much longer history. The first human beings to inhabit Canada came from Asia through Siberia and Alaska more than 20,000 years ago. Their descendants are now called Canada's "First Nations" people. That is another important story.

As far as we know, the first Europeans to reach Canada were the Vikings, who came from Scandinavian countries about 1000 years ago. They established some settlements on the east coast, but for some reason they did not stay long. About 500 years ago, the east coast was discovered and explored by France and Britain.

Soon these two countries started to fight for control of this large new territory. Finally, Britain won and many French settlers had to escape to the United States and other places. Those who stayed in Canada became a minority. They were given territory in what is now called the province of Quebec. However, they formed a very strong French Canadian culture. Soon their numbers increased and so did their political power. Therefore, the English majority of Canadians had to make important compromises with the French Canadians to keep the country together. Eventually, Canada came to have two official languages, English and French.

Later, immigrants came to Canada from many other countries. As a result, if you walk down the street of any large Canadian city, you will probably hear several languages being spoken, not only English and French. In other words, Canada has become what is called a cultural mosaic. It has an official policy called multiculturalism, which encourages immigrants to keep their own ethnic culture from their mother country while respecting the cultures of other ethnic groups in Canada.

Because Canada is so young, it does not have as many cultural assets and artifacts as older countries. Recently, the government has designated some of the oldest buildings and houses as heritage buildings, but these are not nearly as many or as old as the cultural sites that you can find in Europe. Also, because Canada has so many immigrants and is so culturally diverse, it does not really have a strong cultural identity.

For this reason, it is said that Canadian identity cannot be defined by one culture called Canadian culture, but rather by what are called "shared Canadian values." These values grew in Canada because Canadians from various ethnic groups needed to work together and keep good relations with each other. Canada's prime minister, Justin Trudeau, explains it this way: "There is no core identity, no mainstream in Canada ... (but) there are shared values — openness, respect, compassion, willingness to work hard, to be there for each other, to search for equality and justice." These common values are what make us Canadians feel proud of our identity as Canadians.

グリム童話の「森」と環境に優しいドイツ人の行動

国際言語文化センター教授 藤原 三枝子

世界中の人々にとって「グリム童話」はとても身近な存在として、ドイツの文化的所産の中で、重要なものと言えるでしょう。グリム童話は、ヤコブ・グリム (Jacob Grimm) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm) の兄弟が口伝えされていたお話を集め、『子どもと家庭のための童話集』(Kinder- und Hausmärchen) として1812年にまず第一巻を出版したものです。子どもの頃に私たちが絵本で読んだ「あかずきんちゃん」(Rotkäppchen)や「ブレーメンの音楽隊」(Bremer Stadtmusikanten)、「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)、「いばらひめ」(Dornröschen)など、グリム童話は何才になってもいきいきと私たちの心に生き続けています。

あかずきんちゃんがおばあさんのお見舞いのために深い森の中にある家でオオカミに襲われる情景、年をとり、飼い主にもはや無用と見做された動物たち(ろば・犬・猫・鶏)が森で見つけた泥棒たちの隠れ家に自分たちの居場所を見つけるシーン、貧しさのために森に捨てられた兄のヘンゼルと妹のグレーテルが、お菓子の家で魔女を知恵でやっつけるありさまなど、森(Wald)で物語が展開し、そこでの恐ろしい体験とその克服によって幸福な生活が始まるお話しが少なくないようです。森(2016: 71-72)によると、グリム兄弟はその後何度も修正や補足を加え、1857年の第7版では210話の中で森に関する話は101に上り、全体の約半分を占めています。それだけドイツ人にとって森は、いろいろな物語が生まれる特別なところなのでしょう。

日本人も鬱蒼とした森に対しては、恐ろしいところと同時に、聖域としての「禁足の森」のように神聖・神秘的なところという感覚を抱いているのですが、ゲルマン民族にとって森



は自分たちの根源という思いがあるようです。ドイツ人は昔から森とともに暮らし、ドイツ文化は深い森の中から生まれてきたと言われていました。ドイツ南西部に位置するバーデン・ヴュルテンベルク州の「黒い森」(Schwarzwald)にあるいくつかの町では、キリスト教が普及するずっと以前の、古代ゲルマンの春を待つお祭り



である「愚者のパレード」が行われます。これは、愚者(ナル: Narr)と呼ばれる仮面を被った人たちが、キリスト教の広がりによって森の奥深くに追いやられた怪物や魔女たちに扮して街を練り歩くお祭りです。アインシュタインの生地であるライン湖畔の町ウルムも同様に、「舌を出せ」(Zunge raus - zong raus!)という一万人を超える仮面の魔女たちによる愚者の祭りによく知られていますが、アインシュタインが舌を出している有名な写真もこの民族の祭りと同様に関連しているように思われます。

環境先進国と言われるドイツの環境に対する意識の高まりは、第二次世界大戦後の工業化による酸性雨の影響で、「黒い森」に代表される森で木々が立ち枯れるのを目の当たりにした人々の草の根運動に始まり、それが緑の党(Die Grünen)の結成につながっていきます。ドイツ人の環境に優しい行動や考え方は、森は魔物が住む恐ろしい未知の世界とともにゲルマンの時代から続く豊穡の神々の住むところでもあるという思いが人々の心の底に流れ続け、その「森が死んでいく」(Waldsterben) ことに対する大きな危機感に端を発しているのでしょう。

参考文献・資料

森涼子(2016)『グリム童話と森』築地書館

NHK『ヨーロッパ冬物語: 舌を出せ 愚者たちの祭典~ドイツ・ウルム市』1997年2月27日放送

挿画(ブレーメンの音楽隊): 大阪ドイツ文化センター『わたしのグリム』1985/1986より

写真:(黒い森) 芝井彰氏提供; (Schramberg Karneval) ドイツ観光局提供

フランス人とパリの Patrimoine (文化遺産)

国際言語文化センター教授 D・シッシユ

世界中から、毎年数千万人の人々がパリを訪れています。パリが美しいのは、歴史的建造物があるからだけではなく、建物の色や高さが揃っていることで町並みが落ち着いており、全体の調和がとれているからでしょう。また、美術館や文化遺産が多いため、パリは芸術の都 (ville d'art) としばしば呼ばれます。大部分のフランス人が、自国の歴史的遺産、豊かな芸術に対して高い意識をもっていると思われます。

美術館といえば、まず、頭に浮かぶのは、ルーヴル美術館 (Musée du Louvre) でしょう。ルーヴルは、歴史的にも、フランスを真に象徴する場所だといえます。なぜなら、中世に建てられたルーヴル宮殿は、もとは国王の住まいでしたが、18世紀の末に起こったフランスの革命を経て、フランス国家の遺産となりました。その後、19世紀初頭、ナポレオンのお陰で美術館に生まれ変わりました。ナポレオンから館長に任命されたドミニック・ヴィヴァン・ドノン (Dominique Vivant Denon, 1747-1825) が、ルーヴル美術館を創設しました。この美術館は、古代から近代までの様々な芸術作品を展示するという役割を担っています。勿論、開館以来、美術館は変わり、はるかに大きくなりました。ミッテラン大統領の任期中 (1981-1995) に建造された Pyramide du Louvre (ルーヴルのピラミッド) は、世界中から観光客を迎えています。収集品もさらに増加し、企画展を訪れる人々の数は2017年に年間800万人を超えました。最も有名な作品をいくつか挙げれば、古代エジプトの「書記の像」(le Scribe)、古代ギリシャの「サモトラケのニケ」(la Victoire de Samothrace) 及び「ミロのヴィーナス」(la Vénus de Milo)、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」(la Joconde) 及び「聖アンナと聖母子」(la Sainte Anne)、ヴェロネーゼの「カナの婚礼」(les Noces de Cana)、ダヴィッドの「ナポレオンの戴冠式」(le Couronnement de Napoléon)、ジェリコーの「メデューズ号の筏」(le Radeau de la Méduse)、ウジェーヌ・ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」(la Liberté guidant le Peuple) などです。ルーヴル美術館は、古代からの多くの美術品を所蔵しているだけではなく、数世紀のフランスの歴史をも垣間見ることができる場所で、図書館も会議室もあり、定期的に講演会などが実施されています。

パリには勿論、他の美術館もたくさんあります。19世紀後半の印象派の作品を多く所蔵するオルセー美術館 (Musée d'Orsay)、ヨーロッパ以外の文明を紹介するケ・ブランリー・ジャック・シラク美術館 (Musée du Quai Branly-Jacques Chirac) や東洋を中心としたギメ美術館 (Musée Guimet) など。また、パリの歴史を紹介するカルナヴァレ美術館 (Musée Carnavalet)、ヴィクトル・ユーゴー博物館 (Maison de Victor Hugo) などの美術館も大勢のビジターを迎えています。こうした多くの美術館の存在、多くのフランス人が美術館を訪れるという事実が語っているのは、フランス人がいかに自国の文化を大切にしているかということです。

しかし、美術館以外の場所でも、パリとフランスの文化に触れる機会があります。例えば、毎年9月中旬、「ヨーロッパ文化遺産の日」(Journées européennes du Patrimoine) が開催されます。この行事のため、通常は未公開の歴史的建造物が二日間公開されます。一般的には、入場は無料です。一般の市民も、フランス大統領公邸のエリゼ宮 (Palais de l'Élysée)、国民議会議事堂のブルボン宮 (Palais Bourbon)、元老院の議事堂であるリュクサンブール宮 (Palais du Luxembourg)、パリ市役所 (Hôtel de Ville) を訪れることが出来ます。様々な大学や高等学校も公開されています: 例えば、13世紀に創設されたソルボンヌ大学 (Sorbonne)、16世紀の前半に創設されたコレージュ・ド・フランス (Collège de France) やエリート高校とされるヘンリー4世高等学校 (Lycée Henri IV)。この「ヨーロッパ文化遺産の日」はパリだけではなく、フランス全土、ヨーロッパの国々でも実施されています。例えば、2018年には1千2百万人以上の入場者が利用しましたので、大成功であったと言えるでしょう。



リュクサンブール宮



パリ市役所

中国の世界遺産

—平和を求める万里の長城—

国際言語文化センター教授 胡 金 定

中国の世界遺産は、2018年時点で文化遺産が36件、自然遺産が13件、複合遺産は4件で、合計53件あります。中国は、イタリア（54件）に次いで2番目に多くの世界遺産を有する国です。しかも、もしかしたらまだ、見つかっていない遺構や遺跡がたくさん眠っているかもしれないという、底知れぬパワーを秘めた国でもあるのです。そんな中国の53の世界遺産の中から今回は、北京周辺から8851キロに延伸している万里の長城を紹介しましょう！

世界有数の巨大建築「万里の長城」（1987年登録）

万里の長城その雄大さはもはや説明不要です。

世界最大の建築物にして中国一有名な観光スポットと言っても過言ではないでしょう。現存する個所だけでも総延長約8851kmとも言われ、見どころは数多くあります。



秦の始皇帝によって作られたと言われることが多い万里の長城ですが、実はそれより前の時代から、北方騎馬民族の侵入を防ぐための壁や砲台や土塁はあちこちに作られており、それらをつなげて整備したことで、始皇帝の功績として伝えられるようになりました。

さらにその後も、中国大陸に巨大な王朝が誕生するたびに長城は修復・追加延長され続けたため、現在に残るような巨大建築物となっていったのです。

1500年以上もの年月をかけて築かれた万里の長城。

時代や場所によって、その表情は様々です。中でも都市部からのアクセスの良さなどから観光の定番とされているのが、北京近郊にある「八達嶺長城（はったつれいちょうじょう）」です。明王朝時代に築かれたものと考えられています。山の合間を縫うようにして延びる長城の姿はまるで地を這う龍のようです。ロープウェイなども完備されています。

紀元前220年、天下を統一した秦始皇帝は、より早い時代に造られていた軍事的防御施設を一つに繋げ、防御システムとしての長城を整備し、北方からの侵略に対抗しました。また、それは明代にまで、その時々に応じて修築・増築され続け現在の姿になりました。長城の文化芸術の価値はその歴史と戦略上の重要性にあり、河北、北京、内蒙古、山西、陝西、寧夏、甘粛などにまたがる全長約8851km（2012年中国国家文物局により、総延長が2万1196.18キロメートルにのぼると発表されている。）の世界で最も長い防御施設です。また外敵防御以外にも、通信と行商人の往来保護において重大な役割を果たしました。

土、れんが、石を主な建築材料とし、防御の主体である城壁は地形を利用して山と平原の險阻な場所に造られました。一定間隔ごとに情報伝達の為の烽火台が建てられ、昼間は煙をあげ、夜間は火を灯しました。また、長城沿線の重要な駐屯拠点として、密閉性のある砦と城壁を備えた関所を形成しました。現在観光地となっているのは関所を中心とした部分で、山海関、八達嶺、慕田峪、司馬台、嘉峪関などが有名です。そのうち八達嶺は明代に形成された代表的なもので、道が四方八方に通じる要衝の意味でその名がつけられました。最西端の嘉峪関は「天下の険しい関所」と称され、堅固な当時の姿を今に留めています。



中国では古来より「長城に登らざるは好漢（おとこ）に非ず」という言葉があり、長城は中華民族の精神力のシンボルになっています。

朝鮮時代の都城に現れる儒教思想

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

コリア (Korea) 半島には三国時代 (BC18 ~ 660) に仏教が伝来され、その後、統一新羅時代 (668 ~ 935) を経て高麗時代 (918 ~ 1392) に仏教は国教に等しかったと言えます。しかし、李成桂 (1335 ~ 1408) が 1392 年に高麗王朝に代わる朝鮮王朝 (1392 ~ 1897) を開創し崇儒抑仏の政策、つまり仏教を抑圧し儒教を崇拝するのを国家の統治理念の根幹にしました。

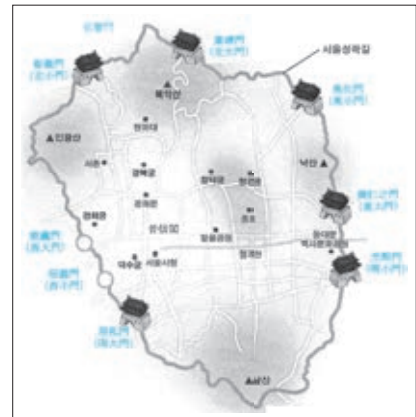
儒教とは、孔子 (BC552 ~ BC479) が唱えた道徳・教理、つまり孔子を始祖とする思考・信仰を体系化したものと言えます。儒教では「仁・義・礼・智・信」という 5 つの徳目で説いており、これらを五常または五徳とも言います。仁は人を思いやる (愛する) こと、義は正義、礼は上下関係で守るべきこと、智は道理をよく知り得ていること、信は友情に厚く誠実であることと説明することができます。一方、孟子 (BC372 ~ BC289) の四端説では「仁・義・礼・智」の 4 つだけを取り上げています。この 5 つの徳目は、万物は 5 種類の元素である木・火・土・金・水からなるという五行説 (五行思想) とも深い関わりがあると考えられます。

朝鮮王朝は、儒教の導入だけではなく高麗の首都であった開城から漢陽 (今のソウル) へ遷都も行い、王宮とともに都城も新たに築造しました。都城の造築は、太祖 5 (1396) 年に始まったのですが、そこには儒教思想が色濃く反映されています。次の図で見るように、都城には 8 つの城門、つまり 4 つの大門、その間に 4 つの小門を設けています。4 大門は、興仁之門・敦義門・崇礼門・肅清門 (今は肅靖門)、そして 4 小門は光熙門・昭徳門 (今は昭義門)・彰義門 (今は紫霞門)・弘化門 (今は恵化門) です。これらの城門は時代の流れの中で今の名称に変更したものもあります。

『朝鮮王朝実録』の太祖 5 年 10 月 (乙卯) 条には「正北曰肅清門、東北曰弘化門、俗称東小門、正東曰興仁門、俗称東大門、東南曰光熙門、俗称水口門、正南曰崇礼門、俗称南大門、小北曰昭徳門、俗称西小門、正西曰敦義門、西北曰彰義門」と記しています。すなわち、「正北は肅清門といい、東北は弘化門とするが、その俗称は東小門です。正東は興仁門といい、俗称として東大門とします。東南は光熙門といい、俗称は水口門です。正南は崇礼門といい、俗称は南大門です。小北は昭徳門といい、俗称としては西小門とする。正西は敦義門といい、西北は彰義門とします」とあります。

そこで、東・西・南の大門には儒教の徳目である「仁・義・礼」を用いた名称を付けています。つまり、東の「興仁之門」は仁を興す門、西の「敦義門」は義を篤くする門、南の「崇礼門」は礼を崇める門という意味合いが込められています。北だけは、最初の肅清門から今の肅靖門という名称になるまで儒教の徳目の「智」は付けていません。しかし、1592 年の文禄・慶長の役 (秀吉の朝鮮侵略) と 1636 年の丙子胡乱 (清の朝鮮侵略) に際し、漢陽が陥落され避難の重要性を感じた肅宗という王は在位 41 (1715) 年に都城の北と北漢山城を繋ぐような門を建てて「弘智門」と称しました。弘智門は都城の門ではありませんが、都城の北側に「智」を付けた門を建立し、儒教の 4 つの徳目である「仁・義・礼・智」を整えました。そこで、儒教の 5 つの徳目を考えた場合、欠いていた 5 つ目の徳目の「信」を付けたのは、都城の門ではなく漢陽の中央の「普信閣」という鐘楼です。もともと鐘を吊し時刻を知らせた鐘閣は、太祖 7 (1398) 年に創られましたが、数回の焼失と移転を経て現在の場所に普信閣の額を掲げたのは高宗 5 (1895) 年のことです。

漢陽を取り囲む 18.2km の都城は、植民地支配期 (1910 ~ 1945) に取り壊されたりして、その半分以上が消失しています。諸門は復元をしたりしていますが、敦義門と昭義門は消失のままです。これらの門の中でもよく耳にするのは、俗称の南大門と東大門ですが、その近くにはそれぞれ南大門市場と東大門市場という市場が形成されており、その市場も有名です。ちなみに、崇礼門 (南大門) は韓国国宝 1 号、興仁之門 (東大門) は韓国宝物 1 号として指定されています。このように、朝鮮時代の都城には、当時の社会に儒教思想を取り入れていたことを今日に残しています。



重要文化財 『徒然草』

国際言語文化センター准教授 谷 守 正 寛

本誌のテーマ「各言語文化圏における文化財」と言えば、筆者の場合は日本語専門なので日本における文化財ということになりますが、一般のイメージでいう、いわゆる「日本の文化財保護法第2条及び日本の地方公共団体の文化財保護条例において規定されている」ところの「文化財」といったものについては門外漢になります。が、筆者は授業で日本人の考え方の源流を知る教材として活用することもある『徒然草』が、都合の良いことに国の重要文化財に指定されており、ちょうどよい材料にできそうなので、これについて少しくふれることにします。この文化財の主情報には、「主名称：徒然草〈上下／〉、指定番号：02287、枝番：00、重文指定年月日：1974.06.08（昭和49.06.08）、国宝重文区分：重要文化財、部門・種別：書跡・典籍、卜書：永享三年三月、卯月正徹書写奥書、頁数：2冊、時代区分：室町、年代：1431、所在地：東京都世田谷区岡本2-23-1、保管施設：公益財団法人静嘉堂」等とあります。『徒然草』は書かれて相当経ってから原本が写されて読まれるようになったもので、文化財としては南北朝時代にかけて吉田（卜部）兼好によって執筆されてから百年後に奥付付きの二巻組となって現存するに至りました。江戸時代に刊行されて一般庶民に広く読まれるようになったために、日本人の現在でも通じるものの考え方に少なからず影響を及ぼしたかとも想像できます。

さて、その暇潰しに書き記したたわいもないという随筆の中から、七百年経った現在でも共感できそうな段を一つ抜粋して、筆者による現代語訳で見てみましょう。

都では高貴な者とそうでない者や老若が皆行き先を持ち帰る家を持つ。帰れば夜寝て朝起き仕事に出かける。こんなことに何の意味があるのか。命に執着し利益を求めてとどまる事がない。養生して待つのは老いと死だけである。死はすぐに訪れる。迷える者は死をも恐れない。名声や利益に溺れ近づく死を顧みないのだ。また愚かな者は死を悲しむ。人は永遠に生きないことを知り、諸行無常を理解せねばならない。（第七四段）

変化の理、つまり諸行無常を知るべしということを説いていますが、たしかにこのような感じ方が欧米人の思想にみられるのかというと、あまりなからうと予想されます。このような考えは、筆者自身が徒然草を読む前から共感できようものであったろうことからみると、一応は仏教などを受け入れている日本人の脳裏にはもっと遡った頃からすでに刻み込まれていたのかもしれない、とすれば、筆者もそうなのかもしれないと内観すらできるわけです。亡くなったら極楽に辿り着けるように祈る様々な現実の儀礼的習慣は、正味ではなくとりあえずのものであって、実は、多くの日本人は生きていても、或いは亡くなっても永遠ではないのだと、内心では無意識であっても、そう感じているのではないかと想像します。兼行が僧でありながら、こうした一見僧らしくないような考えを持っていて説いたことは興味深く、その率直で機微に触れる言い草に江戸の多くの庶民までもが共感を覚え、兼行のように考えたと思いが、そうであれば日本人の多くに共鳴するものが、兼行によって七百年も前に見事に掘り起こされていたと言えることになるかもしれません。

仏教や神道の教えが波及し、とりあえずであっても現実にはそれを道徳律として活かしつつも、恐らくはその執筆時に自身が打ち立てた思想としてではなく、従前より日本人の精神に浸透していたものであったとすれば、兼行の説く教えはすでに心的構造に組み込まれていたとも思われます。筆者の勝手な想像ですが、それは、他国からの侵略による人的被害の代わりに、日本の自然環境下では数万年にわたる地震、台風、洪水といった、その前では人は無力であると諦めざるを得ない不可抗力的な天災のもたらす不幸（死）を被り続け、そのことによって形成された死生観として日本人の遺伝子に備わっているためのようにすら思われます。